湖月抄

發端

1

Freer Gallery of Art
Washington, D C

823
.M8K5

湖月鈔發端條目

此物語作者事
紫式部系図并傳居所墓所等
号紫式部事
式部廣才事
物語之發起
文法
大意
物語准拠
物語時代之下意
物語述作之時代
此物語故人称美事

7152

題号称光源氏物語事
源氏字事
源氏姓事
物語冊数事
巻々次第
諸本不同
諸抄
凡例
巻々付名事
此物語有并之巻事
源氏物語系図 一条禅閤作 同年立 同作 外ニアト
源氏物語表白 外ニアリ

一 此物語之作者 明星抄ニ云紫式部カ筆作勿論之義也。一説云父為時作之。息女式部加筆之由。宇治大納言物語ニ見えたり。花鳥宇治大納言物語ニ今昔越前守為時とて才まさりて世にめでたくおはしける男ありける人ハ紫式部か親なり。此為時源氏をつくりける也。こまかなる事どもをばむすめにかゝせけるとぞ。さきいの多けれバ事をとこうめしてむすめを召出しならば此源氏物語をうつくしく描くれ中つくり出す。よりて後つくりたりけることをやいづれかまことなるらん

明星 此義人の推量の分。女房の胸中より出せる詞とハ見えねハ此説をさりやとハ覚ゆれど。式部カ広才凡人にすぐれねど為時カ作の説猶浅こと似たり

一 法成寺入道 御堂殿也 関白の奥書に云、此物語世に皆式
部が作とのみ知りて侍り。老比丘筆を加ふる所也云云

明星 されど先ゞ自然の事なるべし

一 法説 三 此物語越前守為時書と云ハ非之云云

一 明徳院御記 義久二 而も紫式部書之とのせらる。又清輔
朝臣袋草紙云、故物語の哥乃入撰集ハあるましとかや。
後拾遺雑一、藤為時哥ニ これはなりかはりしと思ひし堂
よ出ふるの夜ゝ月を見てよめり。是ハ源氏物語の哥にこの
物がたりよハいりぬと思ひしとなりや。件の物語ハ紫式部が作
也と云云 師云 古人の法説皆紫式部一人の作とある
づゝむ疑を残す人ありしを

一 此物語の作者紫式部ハ勧修寺元祖良門より五代
前ゝ越前守為時の女、母ハ摂津守為信女黒子とかり

明星抄

系圖

- 閑院左大臣冬嗣公六男 勧修寺元祖
- **良門**（ヨシカト） 贈右大臣正一位 内舎人正六位上
  - **利基**（トシモト） 従四位上右中将 贈正一位 藤原系圖ニ左中将云云
    - **兼輔**（カネスケ） 中納言従三位 号堤中納言 哥人
      - **雅正**（マサタダ） 河 因幡守
        - **為頼**（タメヨリ） 哥人
        - **惟規**（ノブノリ）
        - **惟正** 豊後守従五位下刑部大輔
  - **高藤**（タカフヂ） 小一条内大臣 寛平贈正一位 延喜御外祖 勧修寺家祖

河明 越後守正五位下
歌人
為時
花抄 越前守

女子
上東門院女房号紫式部源氏物語作者
明 母摂津守為信女 常陸守イ
抄 母右馬頭為信女堅子
御堂関白妾云云右衛門佐宣孝室

一 河海抄云紫式部ハ鷹司殿 御堂関白北方一条左大臣雅信公女従一位倫子 の官女也。相継て上東門院に陪侍して、先祖右に註して、後に右衛門佐宣孝に嫁して、大弐三位弁局 狭衣作者 を生

一 河海云式部旧跡ハ正親町以南京極西頬、今の東北院の向也。此院ハ上東門院の御所乃跡也

抄 上東門院彰子御事 一条院后也

御堂関白道長公一女、母従一位倫子云云 長保元年十二月朔日入内 年十二云云 同二年三月廿五日立后 年十三 寛弘九年二月十四日皇太后宮、寛仁二年正月太皇太后宮、万寿三年落飾為尼 卅九 号上東門院、法名清浄覚 下略

一 河海云式部墓所ハ雲林院白毫院の南にあり、小野篁の墓の西也。宇治の宝蔵日記にも見えたり。紫野にあるものなるべし。雲林院ハ淳和天皇の離宮也。賢木の巻に光源氏雲林院にまうでて六十巻と云文ともを見ありし所也。式部ハ檀那院贈僧正の許可をかうむりて天台一心三観の血脉に入り、ましりくして雲林院乃幽閑をおもはれけるも由ある故あるにや

一 紫式部と云事、清濁袋草紙云、紫式部と云名二説あり。一ハ藤式部乃中にも若紫の巻を作る甚深なる乃故に此名を給へり。一説ハ一条院御乳母の子也。上東門院

はしそまつりしむらさきとて名ゆかりあれしなり義と思合（ヲモヒアハスベシ）
ときさきわかむらさきの歌へ此名あり。武蔵野の義と云　河周之
明星　紫の一もとゆへに武蔵野の草ハミながら哀とぞみる
河海云。一部の内紫上の事をすぐれて書なしたる故に藤
式部の名をあらためて紫式部と号せられたり　孟曰
一説云。藤式部の名幽玄ならずとて藤の花のゆかり
に紫の字にあらためられしと云々
明星抄云。紫日記云。左衛門督公任（ノカミキンタフ）あなかしこ此わたり
に若紫やさぶらふとうかゞひ給ふ。源氏に似るべき人も　明星抄曰
見えぬにかのうへはいかでものし給はんときゝゐたりと云々
愚案これ紫の上をすぐれて書しゆへの名とみるに
似たり

一 式部の博学広才（ハクガククハウサイ）のめでたさハ今ひとつ此物語
をはじめ後拾遺以後の撰集に歌数多（アマタ）入たり。儒
学ハ史漢（シカン）の類（タグヒ）此物語に云ところあげてかぞへがたく云りて
河海抄云。紫式部が日記に宮ハ里に出て史記と文
を読などしけり。史記に通しけるをめでたくおもひて
仏道（フツダウ）ハ天台（テンダイ）一心三観（クハン）の血脈（ケツミヤク）をつぎたるなり。又式部ハ観
音の化身なりなどゝ河海にみえたれど。又明星抄云。此
源氏御記云。此物語を始一条院御らんありて不可（フカ）
説（セツ）の物かたり。式部ハ日本紀をよくこそみたるなれ
給ひし時に。左衛門（サヱモン）内侍（ナイシ）此倫言（リンゲン）を妬（ネタミ）て。日本紀の御局
と号されりと云々。紫日記に此事を載たり　在河海
一 此物語之発起
明星云。紫式部ハ上東門院に官女（クハンジヨ）

として同僚の比よ上東門院へ 一条院后 大斎院より 選子内親王 村上天皇十宮
めづらかなる物語や侍ると所望ありしにうつほ竹取
やうの古物語は目なれたれば新しく作りてまゐらすべき
よし式部に仰られければ承りて作りて進之 云云
紫花抄 三之
或曰く
抄云、選子と大斎院と申は円融院より後一条院
まで五代の斎院なりけり 斎院にたつ事五十七年
なりと云

明星抄云、河海に経をかきて分ハ上東門院の給をうけ奉り
て石山寺に詣でて通夜して此事を祈申けるに折しも
八月十五夜の月湖水にうつりて心のすみわたるまゝに物語
の風情心にうかびければ忘れぬさきにとて須磨の巻を書とゞめ

まづこれを依て須磨の巻にこよひは十五夜なりけりとおぼ
し出てといひ 云云されば石山寺に詣て趣向をなし
たまひし縁起によりてなり 云云 さて後須磨に書加
へて五十四帖になして奉りしを権大納言行成卿に清書
させられて斎院へまゐらせられけるに法成寺の入道関白
奥書を加へられけるとぞ 作者の家流の説なり
明云、河海云、石山寺に通夜の時物語の趣向を思ひ得
ご紙なくて仏前にありける大般若の料紙をまうしうけ
て翻(ヒルカヘ)して須磨の巻を書とめける 後に罪障懺
悔のために般若一部六百巻を一筆に自書して奉納
しけり今にかの寺にありといへり 此大般若の事今ハ寺にも分さ
事なりといふ 般若を一筆に書たる事はまぎらはしけれども

実録なしといへり

愚案　是ハ河海抄の文の趣を抜翠にしるせるなり

一　明星云。此源氏の君ハ源氏の左近中将を云なれと西宮左大臣高明公　醍醐天皇の皇子　冷泉院の御代安和二年に太宰帥に左遷せられ給ひしかバ紫式部幼かりしかれどもそのことをおもひ歎きて比すれバ光源氏を左大臣に比し紫上を式部が君によそへて在納言菅丞相の事なとを引周公旦白居易が古を勘て趣向を書出せると云なり

愚案　是も河海の趣なり

一　文法　明星抄云。此物語の大綱荘子が寓言にもとづけり。寓言といふハ己が言をのべて他人の名を借て云といへり。荘子が文法ハ名を作り出して何がなとこしらへをなせるなり云云。寓言ハことく実のなきを云。今此物語にいふ事の源氏をはじめ其事実を移し当ハその人の身の上を云を石ハ実也。されバ荘子が筆をかりてわかり荘子か文章ならす一切経の文章ハ出家のものを唐人がなげこまし くは一切の詞花言葉ハ此物語より出るなるべし

愚案　寓ハ寄也。ほかといわ人の名を作り出してこれによせていふことなきをいふを寓言とす

又云。人の善悪を褒貶して此物語に書出す事ハ春秋の左傳を学びつり孔子の春秋を書てはゞハ君臣をもハ奴人をも善道にみちびかしめんとなり。悪を書るをもハ後生に見せしめて懲さしめんとなり。されバ勧善懲悪と云是也。此物語の作者の本意是之

三流一字ノ褒貶ハ春秋之法也。是則筆誅と云物なり。
此ハ一字二字にて人の行状を顕はしたる也。此類
語にても此をハの一字にて如此の断わかるゝなり
三流々の褒貶ハ資治通鑑の文勢司馬光か例をま
なびたる也。此是ハ素子の地なく何事をも批判したるも
のなるといふにや
明星物語ハ文体を似せたる処ハ史記（司馬遷作）の筆
法をうつし、巻々に流毎に左る史記の句数を摸したれど
此物語の胡ひ挑一川を取つめたるハ志うさして寓言ハ荘子に
ならひたる処の虚誕なり。左處て司馬遷か史記の筆
法をうつされつと
愚案巻の論毎に史記に摸したるに三流を記して奥にあり

もと文虚誕なりといへど唯識のさとしを
一大意　明星、此物語一部の大意ハ好色妖艶をもて
建立したりといへども、作者の本意人としての仁義五常の道に
引入れ出すにハ中道実相の妙理を悟らしめ、出世の善根
と成就すべしとなり。されど河海にも委しの文に仁義の名
好色の媒菩提の縁といへるなり。是をもて名づくとぞ
といへり。拈花微笑之
物凡内典外典ハ千万軸ありて難解難入也。仍て権化の
方便をもつて一代権実内外の書典乃意旨をひろめたる
一部に述ぶる也。志うそ仮名四十七字をもちて出世の方法
をのべたり。明らかなり明鏡に向かふごとくにてのゑとやいふ
是ハ則天地を照らし、況や人間に於いてをや。是に仍て

盛者必衰、會者定離、生老病死、有為轉變の理を源
くあらはし、此うへにおいて世間常住壊空の法文をとき、煩
悩即菩提の文此物語の大意也
或抄云、號名院法親也、此物語は荘子が寓言を摸して作物語
也といへども一事として先蹤本説なきことはなし、好男
女の道をかたるには関雎螽斯の徳、王道治世の始よりかたり
きたれり、その中には好色嬬風のましき由なることをあらはす
は陰なるかたちなるべし、君子のつゝしむ所、もつぱら是にあり、後
人をしてうとしめんとなり、凡て仁義礼智の大綱より、佛果
菩提の本源にいたるまで、此物語をよむ人は何の指南をか
求めん、学者此物語に眼をとゞめてこれをよくまなびとらば
いたづらに書物をのみよみて公私に法あらく

人の心をとつ事、漆唐をもとて物語の情をあらはし、五十四帖
の内に男女のよきあしきふるまひを記し、三四代の事をしるし
たるも万を合をめでたきをのきみのことなれば、資統の人、詩哥
のおもむき、此によりてあらはしめ物語につきて教へ給へといへり
しるべし
明星抄云、帝王四代年紀七十餘年の興廢を今眼あ
たりに見るがごとくにあらはしたり
又云、実に不審とする人あり、此物語は、ひとへに好色淫乱の
風也、何ぞ仁義の道を備へたるといはん、是道をしらざる人の
一偶の見也、それ四書五経して仁義五常を旨とする書に、
特に淫乱の悪虐をあらはせり、是上にかくて悪をしりぞくる
人のおしへ也、尚書に朝に渉るもの脛を切、比干が心をさく賢人

の腑をさられしるあうむりしをうるはずあらしとて自然よりて
べきよれども。毛詩又淫風をあらし戒として。世々の史漢亦
暴虐をあらはし。是後人の戒なり。経教の中にも提婆
が五逆。又仁王経に九百九十九王のくびをとらんとせしこと。
又阿闍世太子の父王を殺害し。母を害せんとせしこと。末
世の群生を戒めんとなり。此物語も好色淫風のことをのせて
此風のいましめとなされども世の放埒とはなれりまれる。四
書五経は人の耳に遠くして仁義の道に入りかたし。況や女房
こどものためには法華経もしられぬ。されば此人の耳にちかく又
人のなさけの淫風を主として善道の媒として中庸
の道に引入給ふは中道実相之経に同じ へつらふ方便権
教也

明 天台一家の心四教に付て化儀化法の差別に四教あり。先化法の四教といふは

三蔵教 四阿含 八十誦律 五部律 一切の小乗論 定戒論の三蔵也

さぬくに経をしも不捨をされて戒定恵の三法門也是小乗也

通 別 円の三教は大乗也三大乗とも云是也

愚案 是五時の説法に付て仏の教の法味をもわけて云也

化儀の四教といふは

頓 漸 不定 秘密

愚案 是又時の説法の品々儀式を解にわけて云也

此物語四教をあらはすとも云

愚案 此事此物語にあらはれてあるやうなし。返而可勘

一 物語准拠之事　河 時代 醍醐（六十代）朱雀（六十一代）村上（六十二代）の三代に准
ずるなり。桐壺御門は延喜、朱雀院は天慶、冷泉院は天暦、光源
氏は西宮（号高明）左大臣。如此相当する也。孟明曰
河 桐壺巻に云 物語に書には おもしろくことわりて 亭子院乃
かゝせ給ひとのたまふ 此ころあけくれ御らんずる長恨歌の御絵
亭子院の御ことを書せたまへるを 挑ける事をそのまゝにかたらせたまひて 又ある藤人と
まのしらつよめきん事は宇多の御門のいましめあれば なと
是は遺誡也
又繪合に朱雀院の御事と延喜の御手づからことわりかきて
かゝせたまへるに 又わが御世のこともかきくはへてといへり
又昭宣公の母は寛平法皇の皇女 延喜の帝の御妹なり
致仕大臣 頭中将 の母も桐壺乃帝の御はらからの御腹とあり 此
外なきと説あり
愚案 是 桐壺帝を宇多の帝の御子延喜になぞらへ
朱雀院を天慶になぞらへ 好説拠也
又云 作物語のならひ 大綱は其人の面影あれども 行迹に
おいてはあながちに事ごとにかれを模すことなし 漢朝の書
籍 春秋史記などいふ實録にも 多くの異同はあるなり 乃桐
壺の帝 冷泉院を延喜天暦になぞらへ なほさくらべ 或は
唐ノ玄宗の古きためしを引 或は秦ノ始皇のかくれたる例
をとり 又天慶ノ御門は相續の皇胤なきことはきゝても 冷泉院の
には朱雀院の御子今上 冷泉院の御後なし 或説云此条可有
者云熟説
は秦始皇の隠たる例とは 日本の皇胤よりそれて
氏の御子冷泉院の 御即位の事は例なしとなり

唐にハ秦始皇ハ荘襄王の子なりといへども呂
不韋が子なる説あり。是を冷泉院の事になずらへてかけり
愚案 玄宗の古事なりしハ桐壺の巻に委
一 光源氏之准拠 此凡作物語のならひ、古き跡を摸しける
事一揆なりしかど、光といふ名ハ仁明天皇の御子西三條右大臣
源光公。此人を摸しける。義男によつて光と称事ハ、廣幡右
大臣兼明親王の子息重光少将、天下第一の義男によつて光
少将と名づく。是を称しける歟
明 源光ハ法道兼備の人也。凡此仁に摸しけるとぞ
此 法義法道より述べしるしたるハ、和延右大臣信公の西殿
を摸すとぞ
一 世に源氏左近の事ハ延喜第一の皇子西宮左大臣高明公
の例也。此公物語ありて二さびさすらへ給ひし人也。高明公ハ
服にて前に源の姓を賜ふ。源氏の君もうしろ見し又高明公の母
ハ更衣周子、左大弁源唱女也。更衣腹を准ずる
須磨の浦に謫居の事ハ行平中納言にならひ給ふ。又謫
居の時風雨の変ありて召し返されし事、周公旦の東征ある
に比せし也。又菅丞相摂州宰府にて天に祈りの事あり。源氏も
訪王又住吉に祈のまうでに似たり
好色の事、在中将の風をまなび、則二条后に准して藤壺
女院二條尚侍 朧月夜に密通のこと有
帝位にのぼらずして太上天皇の尊号を得給ふ事、漢高祖
父太公、是漢の初例也。其の後日本にハ草壁皇子の事也
愚案 草壁皇子ハ文武天皇の御父也

高麗の相人に逢事、延喜ノ皇子文彦太子とおしはかられたり、文彦ハとりたる名、諱ハ保明親王、廿一にて早世
延喜の御代の栄花也

愚云古物之作説ゆへ詳物の趣同之、此物語にハありしよ後世の古事の例を以て古の事とし家物の例也。いづれの御時にかといひくらしたる時代とさだめかたし。是世の褒貶ともならぬまでも、又寓言の筆法也

一 此物語延喜とさしあてゝ出せる事、甚深の故あるを日本の国史ハ日本紀より此方三代実録まてにて人王五十八代光孝天皇仁和三年の八月まての事をしるして後国史なし。此物語とあるを六十代醍醐の帝よりしるしたれハ其の日本の国史にしるしつゞくるやうにて、又五十九代宇多の帝をのぞきて延喜としるしたるハ、聖代無双の明王なるゆへ延喜を高きものとせし、是此作者の趣也

細流云、孔子の春秋を哀公までしるせり、魯は哀公周の敬王の時代にあたれり、是を以左丘明が周元王貞定王の時代までしるして、考王夷烈王以下の事を載ざるを継して司馬温公が通鑑をしるしたる時、夷烈王廿三年よりしるしたるに、是を左伝にしるし残したるへきをしれるゆへ。此物語も醍醐の御代としるさるるを継たりとする説

一 物語述作時代 二 寛弘の始に造之(一条院年号)、康和の末に流布せり
寛弘より康和の間百余年ばかりまで さられしをもしりて世にひろくかゝれる事に、又條之佐 俊成卿 京極黄門 定家卿 の比よりとし云々 明日之

一 此物語故人称美事

明徳院殿記ニ 萬久二年 一切の物語多しといへども なかに
ろす。なかにハ託事(タクスル)し。伊勢物語ハ詞いさゝかうるはしけれども む
上手めきさ詞清勝之。大和ハ殊下にゆるせども外なし。いづれ
の物語ともつくしてことごとく論ずるに、源氏の物語不可説(フカセツ)乃
物也。実に凡人の所為にあらず。紫式部書之。中略 誠に假嘉結
道陪氏一篇につきては不可説未曽有(ミゾウウ)也。下の段に源氏の哥
ハ劣(オトレル)也。狭衣(サゴロモ)の哥こそまされと人申すと云云。此条なほ浅
まれなる、実に同日の論にあらずといへども、誠に狭衣の哥をもすぐれ
てしかるハあれども、源氏のことにハ及ぶべくもあらず。雲泥なるを
凡哥道ハ志ある人ハいふにおよばず、哥道のごとくなる物也。源氏ハ其一
に同つゞき、其二に八哥秀逸。是又何人か是に及ぶか。其二に

ハつくりごと也。虚言をかく優艶を清くとハ是にまさる者
とあるべし。但いまだ見ず不可説也。水鏡云 中山内府 凡史
忠親(タヾチカ)作 紫式部が源氏物語つくりいでして作りハ実に凡史(ボウ)
の不行(ギヤウ)とハ見ゆれども、日本紀をとどめとして家々日記
によりてうつくしく書きしるしおきそへて付の人日本紀の名を
誉し給ひけるとあり。凡此物語の中乃人の振舞をえら
に書きなしたる男女につけて善き人の心をとらしめ
しの道を教へざしとうたがいし。俊成卿云 百番歌合判詞
云 源氏物語を見ざる哥よみハ遺恨のことなりと云云
定家卿云 源氏物語ハ紫式部 哥よみの程よりハ物かく筆
上手なり。此物語をみればいよいよ面白き事あり と云云

一 拾遺抄の事

一題号光源氏物語　弄花抄 金篇光源氏の巻あるを注
聞ともに仍名く細日
河海抄ニ云。此物語をハ必光源氏と号すへし
源氏と云物語数多ある中に光源氏物語ハ紫式部が作と
云云。是今案の義也。紫式部 寛弘六年の日記に源氏物
語の沙汰よあるとよませまてあり。又後にも紫式部かゝ
源氏物語とうきら代々の集乃詞是は皆かし。奥入にも是
より光源氏物語と云物まちあるしハ光と云字を加べし。
さまざまの注類多ければ源氏と計よふくもくるしからず
次
一源字　抄 荀子註根本也　愚云 韻書水之本也
細流云。古今序ニ山下水のたえずといへるかごとく此の源
といへるかごとし。岷江初濫觴入レ楚乃無底　山谷 第四巻 刑敦夫詩 といふか
ごとし。是ハ女のしらうすく出るやうなれども其心深くり
かくねらあり。凡例抄ニ委記作り。仍略之
氏字　正義云氏猶家也 釈例云別而称之曰氏合而言之
曰族
一源氏姓　抄 源字ハ濫觴小水為九河之源の義に拠
して用る也。此物語も如此
河海ニ云 源姓ハ始于嵯峨天子信公
抄 是ハ嵯峨天皇弘仁五年ニ男女皇子三十余人に給て
源氏の姓を下されしより始る也。其前ハ源氏の姓はなき也
其前ハ皇子も凡人になりても多くの姓がありし
也。源の姓が出来てよりハ皇子の別乃姓になりたりハなき

なり。されゆへに帝王の御子なれど臣下にくだるとは、一世の源氏といふ。親王宣下あれば親王也。臣下になる時のならひ、又親王の子の臣下になるを二世の源氏といふ。天子の孫也

一 源氏物語冊数　貞徳云 天台六十巻になぞらへて源氏六十帖とせり。それを中に并の巻ありて廿八帖になる也。是と法華経廿八品に擬えて天台六十巻とぞ云ハ

玄義十巻 天台大師作 法華題目を註す
釈籤十巻 妙楽大師作 釈玄義を

文句十巻 天台作 一部ハ軸文々句々釈也
疏記十巻 妙楽作 釈文句を

摩訶止観十巻 天台作 大意を釈す
弘決十巻 妙楽作 釈止観を

下巻づゝ六部 総合六十巻也。今の物語ハ霊源の巻として源氏の源さ世まふまで甚名なりきて、并の五帖ともありりしを、又十四帖みなく源まりて、いんハ天台六十巻にも止観ある十帖のうち三帖をまつりもんなり。加之周礼の六官に内冬官なし。大学格物の篇これ不足あり。此例代多し

一 巻々之次第　三依司馬遷史記

本紀十二巻　自桐壺至白宮
世家三十巻　以宇治十帖比之
列傳七十巻　以并擬之

一 源氏物語諸本不同事　明凡一切の文章に其書中書清書の二あり。又展転書写の誤勝手へうしれ、況太郎の物語書生の失錯句読の義也
お石山にて源氏物語の書始書きてきらんとて又十四帖にかしくなりしを、権大納言行成に清書させられて、大斎院へまいらる。法成寺入道関白法堂殿也 奥書を

加へられて云此物語世人分式アリ絶えのこと云あり、光比丘
尼とハかりける云云

一 河内本　抄 河内守源光行本也　明 以八本校合家
捨為家本ト云

愚案 光行清和十代苗裔 河内守大監物

抄 是ハ此物語をかへて新義などかり義理を
付られ侍る也 悉くの或説ついでにて作者の本意とハ
ちがひたると云云

一 青表紙　明 京極中納言定家卿本也

明 此物語の趣ハ史記の筆法をもとめて同説と如く
書し御りとたと知がたり後生の不知ねよ書生の誤るべし

称しく今案を加へ侍とし改めあらためて既よ正本
ものとなりて物語の本意をうしなへり家よ定家卿の
青表紙を正本 かくて作者の本意を得たり左可寺以前
之也 云云

一 此物語諸抄

源氏奥入　行成卿五代末孫定信子宮内権少輔従五位上伊行之作
抄 定家卿追加物語本奥仍号之

追注加　定家卿作　愚案 奥入の事をさへまうり

水原抄　河内守光行作 河内本註

紫明抄　光行子式部丞親行并紫雲寺素寂作 河内本註

源中最秘抄　同人作　源氏中ノ秘説也

源氏論義　弘安年中論ス源氏物語ノ難義ヲ　明ハ伏見院東宮ノ時此事あり於テ左右八人出ス問題二十ケ条ヲ定ム勝負ヲ

河海抄　九巻　順徳院第三世ノ孫四辻左大臣善成公の作也　一説ニ号ス松岩寺左府ト法名常勝

明　是は多系のよろしき本を拾てもとに故事来歴を引
勘へ義理を述てて是尚河内方に近き也

河海抄序

光源氏物語は寛弘乃始より出来て康和の末よりひろま
りにけるより代々のもてあそび物として所々の抄
いできにける中に中納言定家卿は世々に難義を註して
奥入と号し太監物光行は家々の口伝を抄して水原
と名つけたりされどのこりおほかるを　伏見院御方によりて
時問題をたてゝ論談の勝負をわか
ち。後醍醐院御位のはじめ波利采女の奇絶に作りて
万葉集を講ぜしめ例をうらされきたや。黒戸乃人
数をさだめて五十四帖を講ぜしめ義あらし。先師
忠守朝臣七の中にあり座乃うちを撰りて九つの中に撰り
應ぜしかば志まらりに顧問にあづかりてたびたび秘説を奏
し此事によまれねどよりて来どもなくそれ
惟光良清の風をまなびしに翁あり道を
びし昔より推の年のやどりを君が今に至るまで
よりれ袖の名れのつゆぬれかげさを忘れ業の葉
むろころさしをあらはさんとは此故に中葉の林に捜
おとくゆかめるを正すらざ荒涼の海をたずみく深き浅き

むかしのづら岩根のね乃人しれぬくしてばとしらひてよ川う
よ新猶の萩のかよかをくさくじくをら。あ川ゆく九巻と
を。名つけて河海抄といふりしより宗の堂とむつびなと。
桜乃雪をおもしろさ。これハ浅く見え寡くきころわざとりを
しけれといへども。故きを温新きをしるかりしらとをんかさ
めりいさゝかこれをしるしとゞめ中志かり

花鳥餘情(クワテウヨゼウ) 九巻

一条禅閤兼良(カネヨシ)公作 号ス後成恩寺ト
明有両本一ハ既世ら不全ト一本ハ流預
故よ安本相遠をり

明 河海の誤をたゞして義理を演説(エンゼツ)を。是を桜書表
紙よりハ本遠のうらすみ。されバ吉表紙よハ只奥入一
部の肴をもらのそやらされども河海花鳥の安説すくハ
いろくの物語の東西をよくさとらへしやむ至宝(シホウ)の抄也

花鳥餘情序

あづまとりらくのころそものれらへよをさ。世をしろ川の
なみ乃中よたゞよひろがしく。源ものさしるハくらべる文よ
たくさまあく。らくしかきさまいえんがおいよくえをもて浅
ねが世の至寶ハ源氏物語よこそくかありけれ。是よ川く
代々のかくわそびものとなりく。花鳥の情を詠て数く
の註釈もちくありて雪螢の功をつむといへども。ちかごし
此ごろの河海抄ハかしへいまを勘てくらきあきらかをわり
てりかとし抄中の肴よりあひて。指南の道をかさらむり
いかれど義の海よをまよりて網をかれさら奥をきわり。
洞の林よかぶしてくゐぎと守兎よあくり。猿ものとび
うひおやかりとおくしむかいハ先達のちからさよるそ。つゐよ

色眼の及ふ所を筆舌よりのべて花鳥余情と名付く説
まちまちあり

源語秘訣（ゴヒケツ） 一冊　源氏の内十五ケ條の秘説あり　同作

和秘抄（ワヒ） 一冊　同作

年立（トシダテ） 一巻　同作

これまでハ皆河内本家用る青表紙を用られざり
しに、西三条内府実隆（サネタカ）公 号（ニ）逍遥院（スセウヨウ）（ト） 二条家の弟子と
中興（チウコウ）志ありて、宗祇と御談合ありて、青表紙を用ひ
またそれよりこのかた世々皆此流（ナガレ）にして青表紙を用ゆる

不審抄出（フシンセウシユツ） 一巻　宗祇作　河花の両抄の外不審の事どもを
兼良公へ尋ね申されし問答也

帚木別註（ハツチウ） 一巻　同作

弄花抄（ロウクハ） 八巻 抄 肖柏（セウハク）老人の書、逍遥院潤色（ジユンシヨク）す、久我（コガノ）庶流（ソリウ）
牡丹花老人 号（ニ）夢庵（ムアン）（ト）

細流（サイリウ） 十巻　西三条公條（キンエダ）公 号（ニ）称名院（セウミヤウ）（ト） 之作也

師説 是弄花をもとゝして其不足（タラサル）を補ひ、河海花鳥
の誤をもたゞしく其可否を見用ひ給ひて、花説可然
河説この説或ハ抄に委あらどもあまりしるし給へりと云云

明星抄 十巻　西三条実澄（サネズミ）公 号（ニ）三光院（ト） 之作と云云

師説 細流に発端一冊を加へて所々に小補（セウホ）あり

孟津抄（モウシン） 廿一巻　九条稙通（タネミチ）公 号東光院 玖山公 の作也

貞徳老人云、此外祖父逍遥院殿の源氏物語は伝へあり。

称名院殿に異同多く極め三光院殿に法實堅盛
しくまなびしと云々。愚案此孟津抄ハ河海花鳥宗
祇別注弄花抄を用ひ或ハ要を立て畧しく志説
し於不足の處にハ法説を加ふ。但愚本轉写のあや
まり不少(スクナカラ)して不審の處ども多し。よりて法説を
用ひるの十に三四にとゞまる可惜乎

孟津抄序

光源氏物語ハ寛弘のはじめにいできて康和の末にひろま
りしより世々の翫ひ物として家々の傳となれり
誠に日本の至寶万法いづれかこれにしかんや。しかるに
我家の道にもむねと一部にきはまり侍るとなれ
バ意味ふかく深ければさに入道前太大臣の講談を継
咲きしよし河海抄花鳥餘情の両疏古流に或ハ私あるし
或ハ不叶(カナハ)事あれども家説の旨に弄花抄の為要を云
加へくはしくしれいふかしき事を異同し侍るに合類する
ハ是をもとのごとく又家説の義ハ私と付侍りけり。抑此物語
の書されしことへどもうけバ黄(クハウ)河(ガ)九(キウ)曲(キヨク)も崑(コン)山よりいづるがごとく
上をうんとて張(チヤウ)騫(ケン)も槎(イカダ)に乗りくことせおなりし秋の
はじめに銀河によりて二星に問りあしくともん孟津と
云るに着くるると云。實に吾亦同斟なり。此作者
賢才のよりけく紀事ハ仙術をも及ばざる着なり。此一部
録し畢ぬる月を見もてまあれ七夕なれバ則孟津
抄と名つけるとしるすなり

凡例

一 孟津抄云、源氏をよむハ心地をたゞしくて盛者必衰の心を守りて可見なり。淫してハ好色のことにいろ〳〵よろこぶなり。故に源氏をハ能習て可見云云

一 予先年箕形如庵（ミカタジヨアン）八条宮に奉仕より此物語の講談を受て十ケ条の秘訣三ケの口傳なとを請けたり。又先師逍遥軒貞徳に桐壺一巻の講尺を受て、此物語の口傳なとを受し侍し。此如庵老人ハ初め称名院殿三光院殿よりねつ心ありて、八条の宮乃御前にて講ぜられ侍しとかや。又逍遥軒も細流を以て此講尺をうけたまはりしより細流を以てうけられ侍し。又逍遥軒も九条乃東光院のことみよくとひきゆうりく此物語の奥義をきはめて、後九条太閤幸家（ユキイヘ）公の御前にてわくたらひに講じられ侍しされバ是ハ世に孟津抄とよみひられしよりて此抄にも細流孟津の要抄とりしして河海花鳥の要をとり、弄花明星をひろひさかり要文の師説を交へつ、河をろつたる鮮案をとく人て初心の人乃ことをとりの也

一 此抄に河海、花鳥、弄花、細流、明星、孟津等の諸抄を用ゐハ、肩付に河花弄細明孟とさりとり

一 累(ルイ)年(子ン)諸抄を勘へ合せて予が愚意に加ふるの説ハならべて誰の説、又或抄或ハ抄とばかりあらハし侍し

一 師説とあらはせるものハ皆如菴老人の説也、明心居士此説ハ予が一のミ又 二三と出すハ三光院の御説のうち師説侍し

一 諸抄註解の下に愚ミるこの箇の説をあげてこゝろハ愚案し出して又諸抄の不註(セ)ところあり肩付あらずして註とあるものハ皆愚意の僻案也

一 河海花鳥弄花の説といへども細流の中に書加へらるゝの説ハ多くハ本書を不載、細流と出して細の説河花弄流の説に趣同しき時ハ河同花同弄同流同などあらハして他准之

一 諸抄の古事来(ライ)歴(レキ)註解等の詞繁きハ略し本経の詞とあはせて首書に記し又人々の言語應對心中の趣なとを地文章の註解詞とくなどハ本経の脇付に出して皆童蒙のこゝろやとりやすからんためなり

一 引歌乃所ハ本経の詞よりーの点をもちて首書に引歌 上句斗をあらハし或ハ下句ばかりをあらはせるハ童蒙の口すさみの書口号もあるもの也、又上にある詞(イナタ)としるすべし

一 文章の外にふくめる詞、下のことはりハ粗抄にあらはすといへどもおほくハ志らしがたし よく心を付て味へし

一 右之諸抄の外に或ハ秘説といひ或口訣といひてことおほく譬喩の説をかしくあらはせるもの有り河花弄細流乃諸抄にあらはしおかざる事ハ不足(ル)信用(スルニ)故に此抄にしるさず受也、但桃華の御秘訣三ケの大事等ハ各別のことなるべし

一 凡此抄の中に載るところの人々、氣象・行跡・一家の風
俗・和歌の風體姿詞皆深くありて、ことに遠かるらし
然るを付ても善悪をわきまへ、勝劣をもわかちて、是をよく
あつかはゞ平生修身の為となりぬべき物歟

一 巻々に付名事　花　凡五十四帖の巻に名を四つの心あり。
一には詞をとり、二には歌をとり、三には詞と歌との二つをとり
四には歌にも詞にもなきことを名とせり。天台の教
に四門あり。一有門、二空門、三亦有亦空門、四非有
非空門也。是によそへしとぞ云々

愚案 此巻の名に四つの心あるを、必彼四門の心によそ
へるにあらねど、只四つの数ばかりをなぞらへていへるにや。花ろ

説あるべし。此四門といふ事は、台家には三蔵・通・別・円の四教
ともに四門ありて、十六門といへり。四教ともに四門の心
あるべくさまざま侍り。涅槃經にあれば別に記さず。其外
玄義八、止觀六に委し。當教の四門も文句四にあり。
又此四門の説につきて、源氏一部の称と此道理にあへる
説あり。別に記さず。或説、此四門有空亦有亦空等を
空假中の三諦にあてゝ説あり。台家不学の僻案也。必
不可用者也

按、右説、至近年、此等を見、然而毛詩名篇例あり。此等を
よくおもふべきにや。是師説也

毛詩正義云、名篇之例不過五
名篇之例義無定準。多不過五、少纔取一、或偏挙両

字ヲ或全取一句ヲ偏挙ル則或ハ上或ハ下全ク取則或ハ尽ク或ハ餘ス
亦有捨其篇首撮章中之言或後都遺見文假
外理以定称ス

私云此物語乃巻々の名是をとりて唯もろこし

毛詩正義去名篇之例不過五

纔ニ取ル一ヲ

此物語の巻乃名は只一言をいひ出して字の法にかなふて名としたるに准之

蓬生 哥にも詞にも蓬と計ありて生の字なし

夢浮橋 哥の中にも夢のうき橋の字をとらえて名とせらる

一 或ハ偏ニ挙ク両字ヲ偏ニ挙ルトキハ則或ハ上或ハ下

哥をとりて名とせらるに准せり又哥をとれども詞の

づゝあり

帚木 空蝉 葵 花散里 澪標
玉鬘 御法 幻 橋姫 椎本
東屋 浮船 此も哥をとらず
若紫 哥の中に二字ながらあれども若紫とは
はづして

一 或ハ全ク取ル一句ヲ全ク取則或ハ尽シ或ハ餘ス

哥と詞とをとる也又哥と詞とにあれどもいひのこ
る所あるなり

夕顔 末摘花 賢木 須磨 明石
松風 槿 乙女 初子 蛍
篝火 若菜上 柏木 鈴虫 総角

蜻蛉　以上哥と詞とをとるなり

関屋　こゝハたゞ哥にも関とばかりあり

薄雲　哥にも詞にも雲のうすくとあり

帚木　哥にあり。詞にもなでしことあり

胡蝶　哥にあり。詞にハ蝶とあり

行幸　哥にあり。詞にハ行幸（ギヤウカウ）とあり

藤袴　哥にあり。詞にハ蘭（ラニ）とあり

真木柱　哥にハまきの柱とあり。詞にハまき柱とあり

横笛　哥にあり。詞にハ笛とばかりあり

夕霧　哥に夕霧とあり。詞にハ霧とばかりあり

紅梅　哥にハ梅とばかりあり。詞にハ紅梅とあり

早蕨　哥にあり。返哥にハ初蕨とあり。詞にハ蕨とばかりあり

寄生　哥にあり。詞にハ寄生木にかゝれる蔦とあり

一 亦有捨テ其篇首ヲ撮ル章中之一言ヲ

詞ばかりとりたると唯ぞ

桐壺　野分　梅枝　藤裏葉

若菜下　匂兵部卿宮　竹河　手習

一 或後都遺見文假外理以定称ス

詞のつゞきぬとくをゆくとるなり

紅葉賀　賀の字ハ此巻の詞にあり。他巻にハ紅葉賀と云詞なし

花宴　此巻にハ桜のえんとあり

絵合　此巻に絵の字合の字あれどもはなれてあり

又毛詩に其篇の名ありて言なき物、六篇則此物

猶の雲漢等を此して称せしニ注

愚案是毛詩乃篇に名付る例にひとしからん此物語
の巻々の名必しも義ありとのみいふにはあらじ彼又
ツの例をならべて又其指によりてまちまちなるら
色し

一 此物語有并之巻事。其品二ツあり。或ハ巻々に書続
たる末を出して別に一巻とせるあり。帚木巻此并
初音胡蝶等。横笛巻の并鈴虫等の類也。又或ハ人一
人の心にかなひたるとて一巻に出せるあり。帚木巻の
并空蝉夕顔。澪標巻の并蓬生関屋。白雲巻の并紅
梅竹河の類也。又其并の巻に年紀の次第を立るに比
なく。或竪并。或横并。或無横竪并。此三の品あり
竪の并とハいふハ帚木此并の空蝉夕顔などし。是ハ帚木の
巻ハ源氏十六歳の夜の雨よりして書続りて其事なし
年の夜秋冬の事を空蝉夕顔に次第して書。又其
若紫の巻ハ源氏十八歳 一説十七歳の十二月にて終り。初音巻
ハ十六歳 一説十四歳の正月より出つゞきたり。年紀次
第して竪に出すと云之。横笛の并鈴虫を同しくいへり。
横の并とハ。末摘花巻の并関屋是也。末摘花巻ハ源九十七
歳より十八歳の十二月まで少く。歳末より始るに関屋巻
源氏十八歳の九月の事と出る。是末摘花の中間に事
ことなれども。又繁多なれば別に立てきたりし。此ハ年
紀横に海なれバ云々。又蓬生の巻をみるにつけしら
まへつゞきり十八歳の夜中ならず出たれハ横の并くと花
宴にあそびし次。然ともさ宴の頃に二とせづゝ此古言に

是松風の巻にあるべし
なるかゆへかく東の院へうつりたまふとあるゆへに細流にハ橋姫
の並とのたまへり。橋姫の並とハ末摘花の巻乃類なり。是
蓬生の巻ハ源氏十七歳の二月より冬までのことを見え
しるせり。末摘花の巻乃初ハ源氏十七歳の二月ばかり。去て
横に かよひ行ハ又蓬生の源乃年の若やかなるを并て聖に
けるしるべは横笛を並つゐてある。蓬生の巻を細流の説
なれハ此説なり。又匂宮の並ハ紅梅竹川の二巻ハ大概横
笛を並てる并なれバ、年紀混雑のことあり。但古人
の説おもしと紅梅ハ紅梅大納言の列傳、竹川ハ竹川の大夫
殿の列傳と見るべしとあそばし侍。玉鬘之發端に書く
見侍るべし

一 物語并之例　住よしの物語に第三の並と、春日祭又
第六吹上の巻並、祭ハの後巻の事なりしてあり、又藤原の
松の物語とハ物よれ並一帖あり。是ハの例なり
二十一史記列傳七十巻　以並數之云云　前ニ委